

『研究紀要』に至る道を辿って

徳 善 義 和

(ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校名誉教授)

日本ルーテル神学校は1950年に中野区鷺宮で再度開校された。再度というのは、1909年熊本で始まり、やがて九州学院神学部として、専門学校令によって認可されて、1925年に中野区鷺宮に移転して日本ルーテル神学専門学校となっていたものが、第2次世界大戦中のキリスト教諸教派合同による日本基督教団の成立に伴い各神学校の合同に至っていたからである。戦後の再開は学校としてのなんらの認可も得ずに日本ルーテル神学校として始まったわけだが、1954年にはともかく各種学校の認可を受け、いずれは大学の認可を得ようという計画で、大学のカリキュラムに準じたカリキュラムによって、予科2年、本科3年の神学教育を始めたのだった。再開して間もなく、それ以前になかったことが計画、実行に移された。神学校教員を中心とした神学研究雑誌『神学季刊』の発行である。それはルター研究を中心とした、ルーテル教会の神学の研究を軸に、キリスト教界とルーテル教会教職に新しい研究や知識を提供するだけでなく、神学するチャレンジを試みる意図をもったものだったろう。1951年のことであった。しかし限られた神学教員たちによるこの季刊誌は、神学生の卒業論文を選んで掲載して紙面を補ったりしながら、年4回の発行に苦慮し、しばしば合併号を出したりしながら、1963年の1冊をもって終わっている。察するにこの年、少数の教職員は大学認可の作業に追われていたからであろう。

そこで1964年に日本ルーテル神学大学として認可を受けた後、1966年になって大学の研究雑誌としての再スタートを考え、年1回発行の『神学雑誌』と改めたのだった。これは大学認可に伴って加わった若いスタッフも加わって、研究論文や講演原稿の公表の場となり、また内外の新しい神学文献の紹介の場となったが、そのチャレンジの対象は『神学季刊』時代と大きく変わることはなかったと言ってよいだろう。しかし大学自体は当時の大学設置基準に基づき新築となった、現在の三鷹に1969年に移転し、『神学雑誌』も13号(1980年)まで続けられた。その間学生増を考慮して神学部神学科に神学専修コースとキリスト教社会福祉コースを設けることとしたが、第14号(1981年)からは誌名を『テオロギア・ディアコニア』と改めて、これは2004年(第38号)まで続けられることとなった。編集者の意識の中には、『神学雑誌』の場合に比して、読者にキリスト教福祉関係の読者が加わったという思いがあったろう。誌名を改めた第14号が「キリスト教社会福祉特輯号」と特記されているところからもそれは伺い知ることができる。

この間神学科は教職志願者のための日本ルーテル神学校(当初2年、後に4年)の課程の充実を図るが、社会福祉学科には大学院(当初は修士課程、後に博士課程も加わる)が設置されてその研究と教育の充実を果たしつつあった。加えて2005

年には臨床心理学科（同時に大学院修士課程も認可）が加わり、3学科体制となった。『テオロギア・ディアコニア』も変化を迫られざるを得ないことになった。それは3学科に対応する研究領域の拡大に応じるということと、さらに大学の研究紀要として広く社会の注目を受け、またこれに貢献するという側面からであった。

こうした変化に応じた必要が強く感じられて、大きな転回と展開を見せるようになった結果が現在の『ルーテル学院研究紀要』であって、副題にも付されているように、『ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校 紀要』である。これはこれまでの単なる研究論文や書評などを中心とした発表の場から、他の諸大学や研究機関の研究紀要の基本に即した研究や実績、試行に基づいた、それぞれの専門領域への貢献、問い、チャレンジ、さらには対話の姿勢を含んだものに変わるということである。この変化のための貢献は、他の研究機関、学校での経験をおもちの前田大作教授（当時）に負うところが大きかったことを忘れてはならないだろう。これは第39号（2005年）の紙型のA5

版からB5版への変化や、巻末の「投稿規定」や「執筆要領」などの指示と言った形式的な面に現れただけでなく、3学科の関わる学問領域における、学的な貢献や、必要な学的討論への対応の可能性も開くものであったと言えよう。手元にある第49号を見てもそれは、共同研究の成果としての論文、国際会議における講演、博士論文要約、投稿論文、実践報告などと言った内容にはっきり現れていると言ってよく、今後に期待される可能性を示していると言ってよいであろう。この流れの中で、2014年から大学は1学科（人間福祉心理学科）5コース（キリスト教人間学コース、福祉相談援助コース、地域福祉開発コース、子ども支援コース、臨床心理コース）へと再編した。

このような変化の歴史に応じつつ、『神学雑誌』第1号から通巻で数えられてきて、この『研究紀要』は今年度の発行をもって第50号となる。学的にも、実践的にも充実し、研究的対話に開かれた大学研究紀要としての更なる発展と充実を期待し、また願うものである。